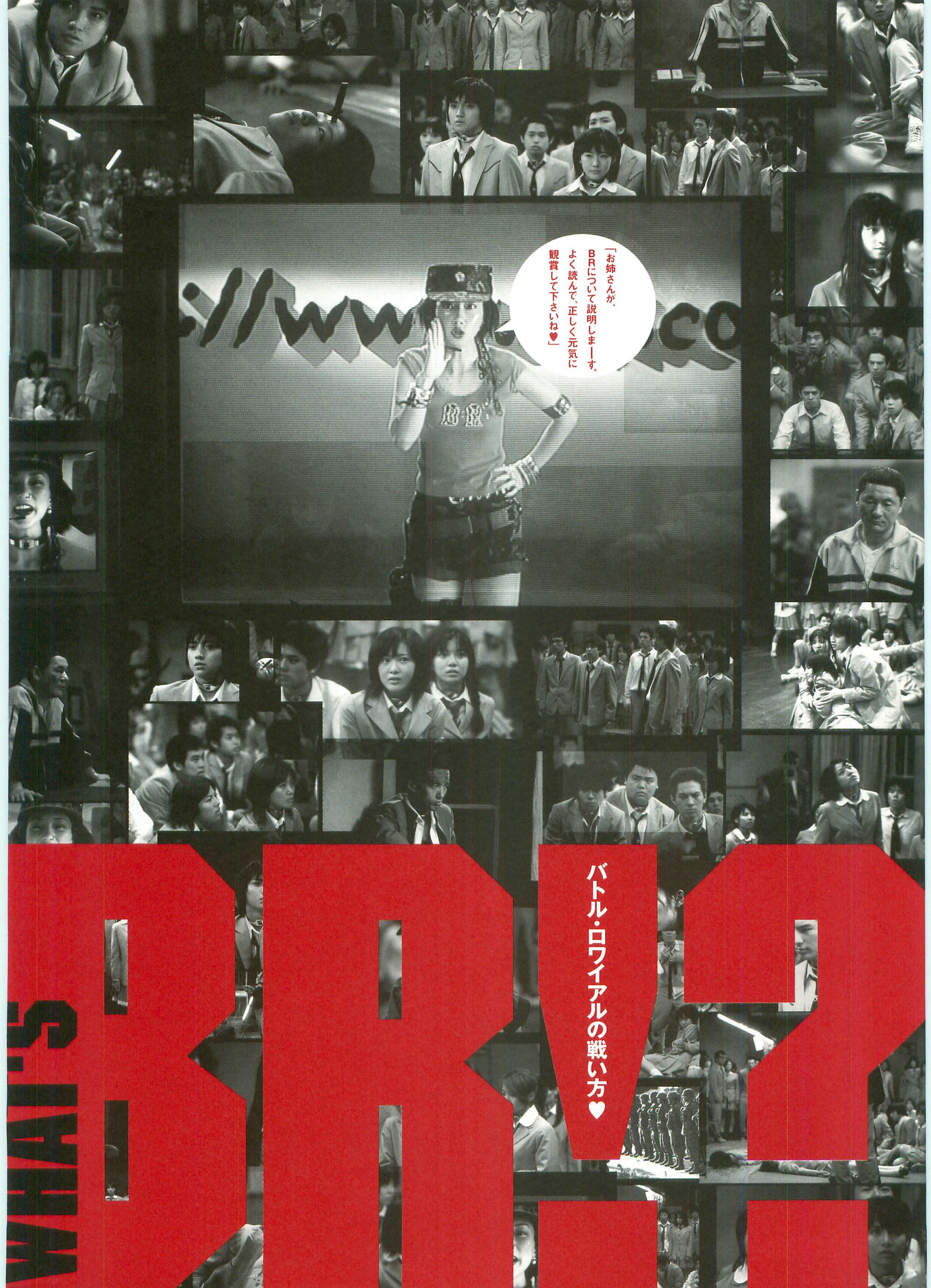
いいかー、この国はすっかりダメになりましたー。
だから偉い人達は相談して、あるゲームを作りました。

【バトル・ロワイアル】

中学三年生のあなたは今、修学旅行のバスに揺られている――。
笑い声や先生の叱り声、好きな人への視線、親友の打ち明け話……。
バスはやがてトンネルへと入る。なんだか今日はやたらとネムイ。深い眠りのあと、友人たちの戸惑う声に目を覚ますと……。

そこは朽ち果てた廃校の教室。城岩学園中学校3年B組の生徒たちは、いつのまにか謎の軍隊によって深夜の無人島へ連れ去られていた！　突然、かつてクラスの担任だった一人の大人・キタノが来て、ゲームの開始を告げる。
「今日はみなさんに、ちょっと殺し合いをしてもらいます」
紹介される謎の二人の転校生。疑念を断ち切るように、鳴り響く銃声。悲鳴。恐怖。突如、襲うあまりに理不尽な親友の死……。
生徒たちはBR法(新世紀教育改革法)の下、健全なる大人を育成するための犠牲として、武器と食料を渡され、最後の一人になるまで殺し合わされる。制限時間は三日間。首には爆薬の詰まった首輪が付けられ、脱出は絶対不可能……！
「人生はゲームです。みんなは必死になって戦って、生き残る価値のある大人になりましょう」

悪夢の殺人ゲームは始まった。日常のなんでもないトラウマが、殺し殺される理由になる。生き残ろうと必死になる者。あきらめて愛する人と死を選ぶ者。力を合わせて平和を訴える者。そして妙に冷静な瞳を持った者……。
友人達が次々と命を落とす中、男子15番七原秋也は、同じ孤児院で育った親友・国信慶時がほのかな想いを寄せていた女子15番中川典子を守るため、武器を取る決意をする。
そして廃校のモニタールームでは、ジッと生徒達の殺し合いを見守る教師・キタノの冷めた背中があった……！
原作は、第5回日本ホラー大賞の最終選考で審査員に「非常に不愉快」と非難を浴びながら、その衝撃的な内容と絶対的な娯楽性で、10代20代の読者層を中心に50万部を越える大ベストセラーとなった高見広春による小説『バトル・ロワイアル』(太田出版刊)。
監督は、撮影中に70歳を迎えた日本アクション映画の巨匠・深作欣二。タランティーノやジョン・ウーにも影響を与えたエネルギッシュな深作演出が、800人以上の候補者から選ばれた若手俳優42人、そしてビートたけしとの夢の対決によって、いま強烈な疑問符と未体験の感動を叩きつける！
「絶望を生き残れ」

上映時間…1時間53分

「お姉さんが、
BRについて説明しまーす。
よく読んで、正しく元気に
観賞して下さいね♥」
WHAT'S
BR?
バトル・ロワイアルの戦い方♥

新世紀のはじめ、ひとつの国が壊れた。
自信をなくした大人たちは子供を恐れ、ある法案［＝ゲーム］が可決された。

Q. BR法ってなんですか？

A. 毎年一回、全国の中学三年生四万三千クラスの中から厳正な抽選によって選ばれた、とーっても幸運な一クラスに、最後の一人になるまで戦ってもらう法律でーす。正式名称は「新世紀教育改革法」。運営・実行は防衛庁、国家公安委員会、ならびに自衛隊の全面支援の下、「BR法推進委員会」によって執り行われていまーす♡ 推進委員会のメンバーは志願した識者や元教職者で、管轄は文部省でーす♡

Q. どうしてこんな事するんですか？

A. 新世紀のはじめ、飽和した世界経済はこの国に大不況をもたらしましたー。完全失業率15%突破、失業者一千万人。全国の不登校児童・生徒80万人。そこで困ったエライ人達は深刻化する崩壊に歯止めをかけるため「BR法」を制定、生き残る価値のある大人を育成する事にしましたー。BR法は等しく国民の皆さんに義務づけられていまーす♡

Q. ルールについて教えて下さい。

A. ルールは簡単でーす。生き残るだけでーす。反則はありませーん。武器と食料は渡しまーす。武器にはアタリもあればハズレもあります、これはハンデをなくすためでーす。戦場はいくつかのエリアに分かれていて、一日四回、午前と午後の0時と6時に放送を流しまーす。放送の中では何時からどのエリアがアブナイと教えますから、ただちに禁止エリアを離れて下さい。なんでアブナイかというと……。

Q. 逃げる事は出来ないんですか？

A. ハーイ、そこで皆さんにつけてもらっている首輪でーす。この首輪は耐ショック性で、絶対に外れませーん。内側のセンサーが皆さんの位置と心臓パルスをモニターしていて、不穏な行動をとる人や禁止エリアに残っている人がいたら……ボンッ！ て爆発しまーす。無理にはずそうとしても爆発しちゃうので、絶対そんな事しないでね♡

Q. ………。

A. あ、それとタイムリミットがありまーす。三日間でーす。三日経っても最後の一人が決まらない場合、全部の首輪は自動的に爆発しまーす。優勝者はありませーん。せっかくだからベストをつくして戦って、絶対そんな事にならないようにねっ♡

Q. 生き残ったら……家に帰れるんですか？

A. 帰れまーす。しかも、生き残ったあなたは、健全な国民のシンボルとして、生涯における一切の生活が保障されちゃいます。ただし、帰れるのは最後の一人だけでーす♡

Q. 自分から参加する事は出来ますか？

A. できまーす。ただいま参加志願者募集中！ 君も、明るい未来に向かってバトルしよ♡

BR法条文（抜粋）

（前文・新世紀教育改革宣言）
われらは、かつて民主的で文化的な国家を建設し、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。しかし新世紀を迎えた今、学級崩壊、不登校など現代の教育現場を覆う数々の難題は、旧来の基本理念では到底解決し得るものではない。対応策はひとつ。〈強い大人〉の復権。われらは今ここに、新世紀に相応しい新しい教育の基本を確立するため、この法律を制定する。

第一条（BRの目的）――バトル・ロワイアル（以下、BR）は、心身ともに健康な国民の育成を目指して行うものである。

第二条（BRの対象）――BRは、義務教育を終える全ての中学三年生のうち毎年一クラスを恣意的に選択、これを対象者とする。なお、その機会はすべての国民に、男女の別、人種、信条、社会的身分を問わず等しく均等にあるものとする。

第三条（BRの方針）――BRの全ての対象者は明るく、楽しく、元気に戦わなくてはならない。

第四条（BRの義務）――BRの全ての対象者は正々堂々戦う義務があり、なんびともこれを拒否、ならびに妨害する事はできない。

第五条（BRの超法的措置）――BRの全ての対象者には超法的措置が認められ、対象者間でなら殺人、放火、銃器や薬物の使用などあらゆる行為が認められる。ただし担当教官並びに運営協力者への反抗、妨害、復讐などについては厳重に処罰される。

第六条（BRの優勝者）――BRの全ての対象者の中から生き残る優勝者は、いかなる理由があろうとも、必ず一名でなくてはならない。

第七条（BRの優勝者の生活保障）――BRの優勝者には、国家が理想とする心身ともに健康な国民のシンボルとして、その生涯における一切の生活の保障がされる。なお、その費用については全ての国民が負担するものとする。

第八条（BRの担当教官）――BRの運営の責任は一切、担当教官にあり、教官は推進委員会の構成メンバーの中から推薦・選抜される。担当教官にはBRを円滑に進行するためなら、一切の超法規措置が認められる。ただし、国家ならびに推進委員会は担当教官の生命の保障は負わないものとする。

第九条（BRの対象者家族への保障）――BRの対象者の家族へは別途規定に基づいた慰安金が支払われるものとする。

第十条（BR補則）――BRを円滑に実施するために、必要がある場合には適当な法令が制定されなければならない。

附則
この法律は、公布の日から、これを施行する。

監修：BR法推進委員会

0:00:00 PM

School Students File

総責任者

CODE NAME:キタノ

01 赤松義生

血液型:B　武器:ボウガン
DATA:クラスーの巨漢。気が小さく、イジメ半分にからかわれやすい。趣味、TVゲーム。

02 飯島敬太

血液型:B　武器:十手
DATA:バスケットボール部。下品に笑うくせがある。三村信史、瀬戸豊と仲が良い。

03 大木立道

血液型:O　武器:手斧
DATA:がっしりした中背。ハンドボール部。陽気で快活な性格。

04 織田敏憲

血液型:O　武器:防弾チョッキ
DATA:高級住宅地に住むお坊ちゃん。趣味はバイオリン。上品を気取るおとなしい性格。

05 川田章吾

血液型:O　武器:銃 SPAS12ショットガン
DATA:神戸からの転校生。実は三年前の大会の優勝者。恋人・慶子を殺して生き残った過去をもつ。

06 桐山和雄

血液型:AB　武器:ハリセンチョップ
DATA:自分から志願してゲームに参加した転校生。ほか全て不明。

07 国信慶時

血液型:O　武器:×(スタート前に死亡)
DATA:「慈恵館」出身で七原の親友。愛称ノブくん。キタノにいじめられ、ナイフで刺した後は不登校だった。中川典子に片思い。

08 倉元洋二

血液型:B　武器:ロープ
DATA:ラテン系ノリのプレイボーイ。矢作好美と遊びでつき合っている。

09 黒長　博

血液型:B　武器:シーナイフ
DATA:不良系。おっちょこちょいで気取り屋。笹川、沼井、月岡、金井と仲が良い

10 笹川竜平

血液型:O　武器:銃 ウージー9ミリ サブマシンガン
DATA:不良グループの鉄砲玉。弱いものイジメが趣味。沼井、黒長、月岡、金井と仲がよい。

11 杉村弘樹

血液型:O　武器:探知器 エプソンロカティオPNV700M
DATA:無口でシャイ。七原、三村、瀬戸と仲が良く、千草貴子とは幼なじみ。実は琴弾加代子に想いを寄せている。

12 瀬戸　豊

血液型:O　武器:フォーク
DATA:お笑い好きでクラスーのお調子者。三村信史の親友で杉村、飯島とも仲が良い。

13 滝口優一郎

血液型:B　武器:ブッシュナイフ
DATA:地味な性格で、人と目を合わせて話をしない。旗上忠勝と仲が良い。B組オタク代表。

14 月岡　彰

血液型:O　武器:ヌンチャク
DATA:不良系。愛称ヅキ。父親がゲイバーを経営していてオカマ(?)という噂もある。鏡をみるのが好き。

15 七原秋也

血液型:B　武器:ナベのフタ
DATA:熱血感。密かに中川典子に心を寄せる。中一で父が死んでから、養護施設「慈恵館」で国信と一緒に暮らしてきた。

16 新井田和志

血液型:B　武器:ハンガー
DATA:努力嫌いで、言い訳がうまい。サッカー部のフォワード。千草が好きで、噂を流した過去アリ。

17 沼井　充

血液型:A　武器:コルトパイソン
DATA:背は小さいが、不良グループのボス。笹川、黒長、月岡、金井をとりまとめる。

18 旗上忠勝

血液型:B　武器:金属バット
DATA:野球部に所属し、身長高めでやや太め。滝口優一郎とは幼なじみ。

19 三村信史

血液型:A　武器:銃 ベレッタM92F
DATA:バスケットボール部の天才ガード。実は天才ハッカー「ザ・サードマン」。活動家だった叔父に爆弾製造法など特殊技能を習う。

20 元渕恭一

血液型:B　武器:銃 S&W M19
DATA:クラスーのガリ勉。品行方正。B組の男子クラス委員長である。

21 山本和彦

血液型:O　武器:「根性」ハチマキ
DATA:クラスーの長身。温厚で飾らない性格だが、気が弱いところもある。小川さくらとは公認のカップル。

BR File Edit Picture Effect Special Window Help

Shiroiwa Junior High

BR法適用クラス　城岩町立城岩学園中学校 3年B組
男子21名　女子21名　合計42名

制限時間3日間 ノンストップ。

ルール無用の総当たり戦。42人の壮絶な戦いの記録。

AREA1／5.22 AM2:40～

出発前死亡：国信慶時・藤吉文世
自殺：倉元洋二・山本和彦・小川さくら・矢作好美

ROUND1
赤松義生 vs 天堂真弓
学校裏。我を忘れた赤松が放ったボウガンが、天堂の首を貫いた。

ROUND2
新井田和志 vs 赤松義生
同、学校裏、赤松が落としたボウガンを拾った新井田が、赤松に向けて発射。

ROUND3
桐山和雄 vs 黒長博・笹川竜平・月岡彰・沼井充・金井泉
砂浜。5人に糾弾される桐山だったが、突然マシンガンを奪い取り、乱射。5人の武器をすべて奪う。

ROUND4
相馬光子 vs 江藤 恵
民家の台所。隠れていた恵をみつけて光子がカマで襲う。恵のスタンガンも持って出ていく。

AREA2／5.22 AM7:00～

ROUND5
七原秋也 vs 大木立道
海沿いの道。海岸の洞窟が禁止エリアとなって北へ移動する途中、大木に襲われる七原。もみ合ううちにナタが大木の頭に。

ROUND6
川田章吾 vs 元渕恭一
同海沿いの道、斜面。半狂乱でリボルバーを発砲する元渕。川田がショットガンで射止める。

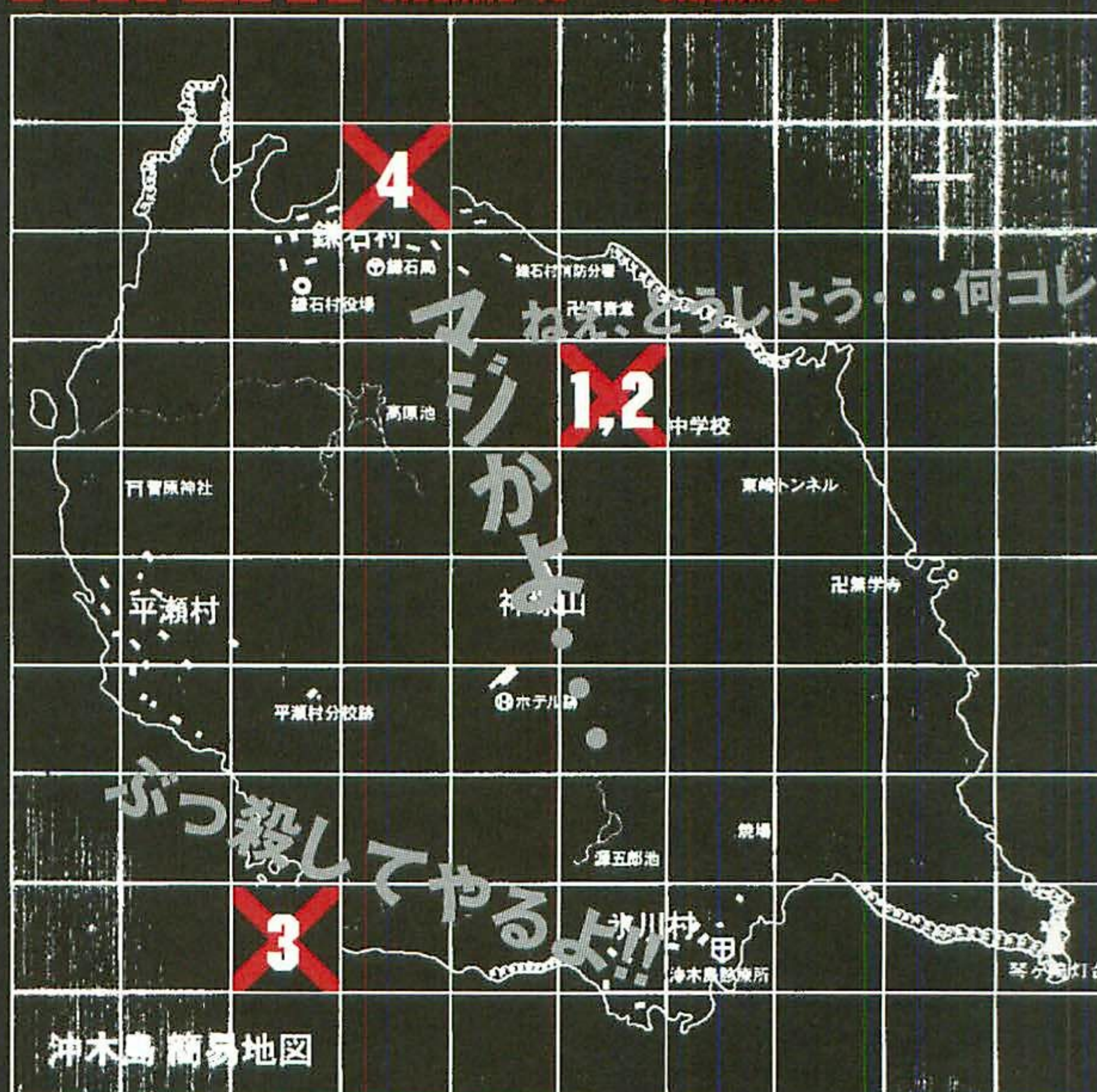
ROUND7
桐山和雄 vs 北野雪子・日下友美子
展望台下の草原。雪子、友美子が島のクラスメイトたちに呼びかけていたところ、桐山に射殺される。桐山、日本刀を奪取。

AREA3／5.22 PM12:00～

ROUND8
相馬光子 vs 清水比呂乃
民家、物置。光子の親友だった比呂乃が実は光子に恨みを持っていたことを吐露。拳銃をつきつけるが、スタンガン攻撃にあい逆転される。

ROUND9
千草貴子 vs 新井田和志
森の中の神社。千草にボウガンをつきつける新井田。逆に折りたたみナイフでめった刺しに。

ROUND10
相馬光子 vs 千草貴子
神社脇小道。光子が千草を狙撃。

AREA1 5.22AM2:40 → 5.22AM7:00

AREA2 5.22AM7:00 → 5.22PM12:00

AREA3 5.22PM12:00 → 5.22PM6:00

AREA4 / 5.22 PM6:00~

ROUND 11

桐山和雄 vs 織田敏憲

診療所、外。桐山の拳銃を防弾チョッキで避けた織田だったが、日本刀にはかなわず。

ROUND 12

七原秋也vs桐山和雄vs杉村弘樹

港。隠れていた診療所を爆破され、港へ逃げる七原。杉村の援護を受け、銃撃を海に飛び込むことで回避。

AREA5 / 5.23 PM12:00~

ROUND 13

稲田瑞穂 vs 南 佳織

森の中。差し違えてふたり死亡。

ROUND 14

相馬光子vs滝口優一郎・旗上忠勝

男ふたりに、光子、色仕掛けで接近し、仕留める。

ROUND 15

内海幸枝vs榊祐子vs谷沢はるかvs中川有香・野田聡美・松井知里

灯台。祐子が食事に毒を入れ有香死亡。疑惑に耐えかねて、皆で銃撃戦を。祐子は、罪悪感から自殺。

ROUND 16

相馬光子 vs 中川典子

森の中。光子、中川に銃を向けるが、キタノが現れ逃亡。

ROUND 17

琴弾加代子 vs 杉村弘樹

漁具小屋。琴弾、杉村に銃を発射。

ROUND 18

相馬光子 vs 琴弾加代子

同、小屋。光子、琴弾を撃つ。

ROUND 19

桐山和雄 vs 相馬光子

同、小屋。光子、桐山の攻撃に抵抗するも、ついに銃弾に倒れる。

ROUND 20

桐山和雄vs 飯島敬太・瀬戸豊・三村信史

廃墟、外。本部を攻撃する爆弾が完成した矢先、桐山のマシンガンに抵抗虚しくやられる。

ROUND 21

川田章吾 vs 桐山和雄

三村の爆弾が爆発し、目をやられる桐山。炎の中で、川田が桐山を撃つ。

AREA6 / 5.23 PM7:00~

ROUND 22

川田省吾vs七原秋也・中川典子

断崖。川田が七原と中川に銃を向けた。

ROUND 23

キタノvs ・・・・・

本部。キタノが構えた拳銃の先に立つ者は・・・

AREA4

5.22PM6:00 → 5.23PM12:00

AREA5

5.23PM12:00 → 5.23PM7:00

14
ふたりの王子様に守ってもらってお姫さまじゃん
20,21
死ねばいいの
まさか・・・だって、わからないよ
神塚山
17,
18,19
13
16
バカ・・・助かるかもしれないのに、みんなバカ・・・
15
氷川村
沖木島 簡易地図

AREA6

5.23PM7:00 → 5.24AM6:00

23
神塚山
22
氷川
沖木島 簡易地図

高野 悪名高き深夜作業組としては異例のスピードで撮影が終了しましたが(笑)、実際に撮影を終えてみて、各俳優の印象はいかがでしたか。

深作 四十二人のなかで、これはと思ったのは、前田亜季ですね。最年少で、正真正銘の十五歳ですが、これがキタノと向き合っても、藤原君と恋愛めいた情感で向き合っても、全然ものおじしないどころか、実にすがすがしく中三の少女を演じきっている。

高野 前田亜季には天性のものを感じますね。吉永小百合さんみたいになるんじゃないかと思います。小柄なのにスクリーン映えしますよね。

深作 そうですね。

高野 アクションシーンでは、ずいぶん苦労されたと思いますが、印象に残っている役者はいますか。

深作 さすがに自分を鍛えているなと思ったのは藤原竜也でしたね。スタント一切なしで、熱いアクションを見せる一方、すごくナイーヴな七原秋也像を造形してくれた。この血なまぐさい殺人ドラマが、清潔な印象を残しているのは、藤原、前田コンビの好演のお陰ですね。

高野 それから、山本太郎。

深作 そう。かなりの反対を押しきっての起用だったけど、その期待に充分に応えてくれた。

高野 太郎は、本当によかったですよ。役者人生においても、彼はすごくいい役を拾ったんじゃないですか。完全に一皮むけましたね。

深作 桐山役に固執した安藤政信の選択も正解でしたね。彼はよく自分を知っている。柔軟な感性と肉体に恵まれているから、今後の活躍が楽しみですね。

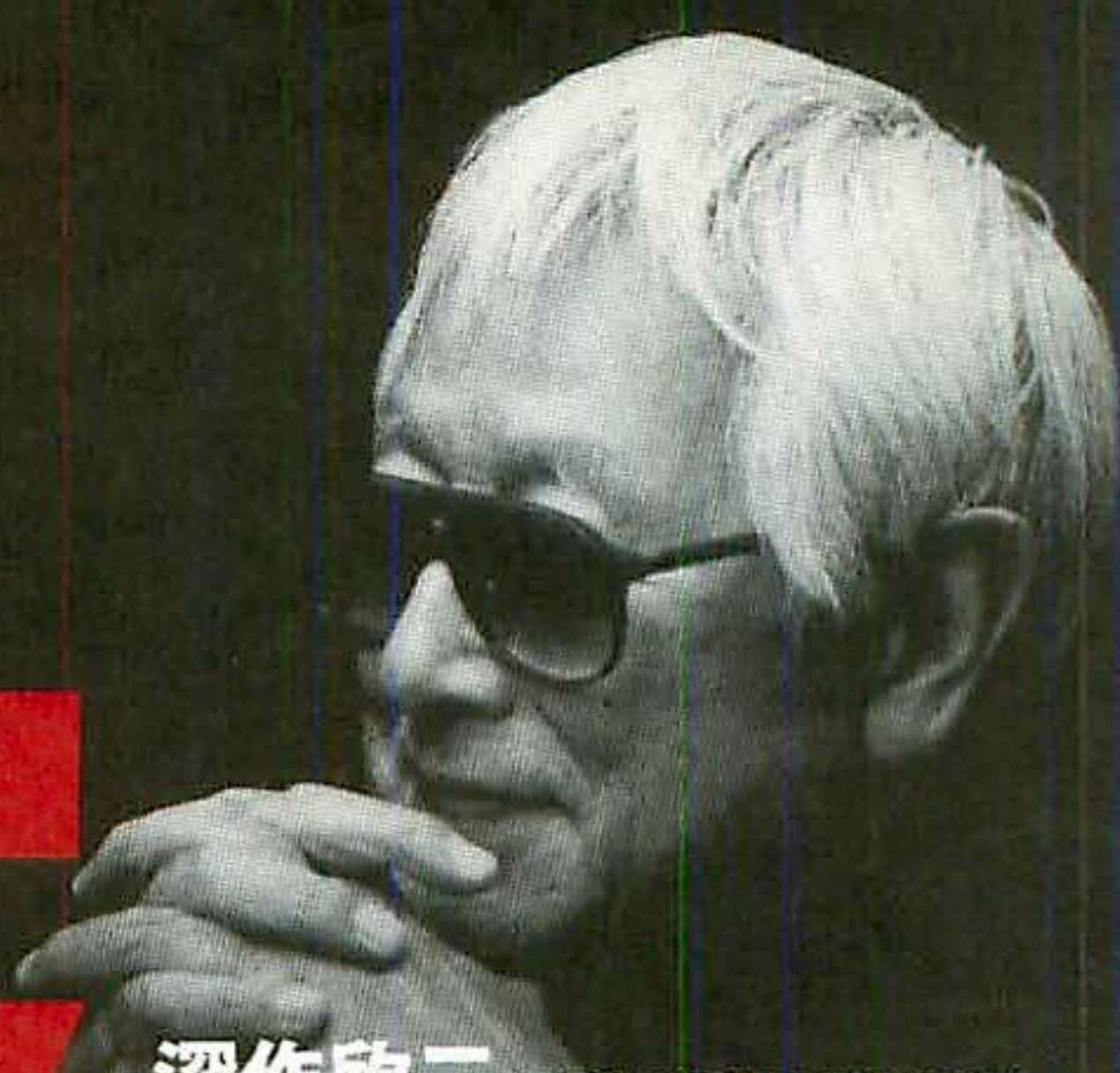
高野 それに、柴咲コウ、栗山千明ら猛女連の活躍(笑)。

深作 柴咲の「死ねよ、ブス」ってセリフが若い女性客の人気の的になってるんで驚いた。

高野 印象に残るセリフですからね。

深作 栗山のナイフさばきと言い、まったくこの頃の女子は怖いですよ(笑)。

く深作欣二

FUKASAKU BATTLETALK

深作欣二(監督) KINJI FUKASAKU

1930年7月3日生まれ。東映入社後、千葉真一主演の『風来坊探偵・赤い谷の惨劇』(61)で初監督。73年にスタートした『仁義なき戦い』シリーズで映画界に旋風を巻き起こし"アクションの深作"の名を不動のものにする。『蒲田行進曲』(82)で各映画賞を独占。近作は『いつかギラギラする日』(92)、『忠臣蔵外伝四谷怪談』(94)、『おもちゃ』(99)がある。そのダイナミックで攻撃的な作風は、クエンティン・タランティーノやジョン・ウーなど海外の監督にも多大な影響を与えている。

高野 怖いといえば、あの灯台のシーン。娘たちが繰り広げる内ゲバもどきの戦いはすさまじかった。

深作 試写を三度も観たという女性客が、あの場面へくると、もう泣けて泣けてしかたがないと言ってましたね。

高野 それこそ、監督冥利に尽きるというか、してやったりという感じですね。

深作 フッフ(笑)。とにかく、子供らが皆よくやってくれましたよ。往年のピラニア軍団そこのけの大活躍で、パート2が撮りたくなった(笑)。

高野 スケジュールのことを考えたら、ビートたけしさんの起用っていうのは諸刃の剣という感じがなきにしもあらずじゃなかったですか。

深作 どっちみち、セリフは正確に覚えてこないだろうと思っていたから、カンニングペーパーをずらーっとセットの壁一杯に張り巡らせて待っていたら、入ってくるなり吹き出してね「こんなことしていいんですか?」って。「いや、気楽にやってくれ。マーロン・ブランドだって、丹波哲郎だって、一流のオバケ役者はこういう手を使って名演技をやっているんだ」と言ったんだけど、どっこい、入ってるんですよ、セリフが。これには驚きました。見事に入ってた。

高野 セリフをしっかり覚えて現場に入るし、アドリブも冴えている。一流といわれる由縁ですね。

深作 そういう意味でも一流でしたけど、何といってもあのキャラクターですね。あれだけ酷薄な設定の役柄にもかかわらず、首くくった七原のオヤジと同じように苦しんでるんだ、こいつも、と観客に思わせてしまう説得力。

それから一番最後には中川典子に「やっぱり心中するんならお前だよな」と迫るあたりは、自分で演出しながらもすごく腑に落ちる快感があった。

高野 あそこはやっぱり映画になってますよね。水鉄砲で撃ちあって被弾する。最後に起きあがって、「馬鹿野郎」って言って、ちゃんとピストルを持っていたことをわからせるというあざとい演出(笑)。

深作 それから最後、あれもよかった。クッキーくわえたまま、ふらっと死んじゃうというあの芝居。すごく好きでしたね、私は。

高野 たけしさんはインタビューなんかでも、自分が監督をするときに、役者から、こうしたらどうかとか言われるのが嫌だから、監督のおっしゃる通りに演技しようと思った、て言ってますよね。

深作 ええ、たしかに何にも言いませんでしたね。

高野 そういう意味では、すごくプロの集まりだったという感じがしますよ。いや、これも期待以上のキャスティングでしたね。

深作 ええ、期待以上でした。

高野 クライマックスに出てきたあの絵は、たけしさん自身が描いたものを使っていますよね。お願いする時に、細かい注文も出したんですか?

深作 いいえ。ラストがどうなるかもまだ決まってなかったから。ただ典子との関係というのは、美女と野獣というか、そういうことを予測しているんだけどという話はしましたが、絵ができあがったのはあのシーンをとる直前でした。とにかくそんなイメージで典子を描いてくれと言ったら「どうもよくわからないから、キラキラお星様描いちゃった。いいんですかね、これで」「大変けっこうです」。いや、ホントに好きだったなあ、あの絵は。

高野 緒形拳や(片岡)鶴太郎には描けない絵だ。あざとさがありませんものね。

深作 手厳しいね(笑)。でもやっぱり、あの絵はたけし君しか描けないでしょう。「これは小学校六年生の感覚で描こうと思った」と言うのを聞いて、やっぱりただもんじゃないな、絵を描かせても、と思った。

彼が映画を撮るときにずーっと組んでるキャメラマンの柳島が今回僕の組についてくれたんだけど、一体北野監督は、キャメラマンにどういう注文を出すんだと聞いてみた。すると「注文というのは別にないけれども、ひとつ思い当たるのはパチカメの感覚で撮ってくれ」と。つまり素人がポンとパチカメで撮ると、人間がセンターにいてむやみに余白がある写真があがる。画として凝らないで、投げ出すような感覚で撮ってほしいということなんですね。彼の映画を観ると、この言葉はすごくよくわかりますね。

高野 またそういう注文を出せるというのが、なんだかしゃくに障るけど、わかりすぎているというか。

深作 それでまた柳島が、今度の『バトル・ロワイアル』はどうするのか。こっちもあまり注文しないでほったらかしていたんだけど、どんどん画が詰まってくるんですね。そうかといって、これまで僕がやってきた画の詰まり方とは全然違う、ある余白がある。それがよかったですね。彼のカメラ、小野ちゃんのライティング、おかげですごく好きな作品になりましたね。それにしても、いいキャメラマンですよ、彼は。性格もいい、ごたくも言わない、そして変に熱くならない。

高野 スタッフも一流どころが集まった現場という感じですね。

深作 それにしても、七十歳のジジイが十五、六歳の子供らつかまえて「走れー、転べー、死ねー」なんて、こんな戦争ごっこやっていいのかなーと、ふと思うことはありましたね(笑)。

高野 芸術家は完璧に実年齢をジャンプしていきますよね。同時にまた、十代の子供たちも、学校では教えてもらえないことを体感できたんじゃないかな。作品が社会に与えるインパクトもさることながら、映画製作の現場で、まずは子供たちにまじめに生きること、与えられた役割をまっとうすることを教えることがで

きた気がする。実社会であの子たちが、あれほど"NO"を突きつけられることはないでしょうからね。

深作　そうですね。でも時々ふっとね、子供たちはどういうふうに思ってるのか気になることはあった。しかし子供らも心から楽しんでいたみたいだったから。もっとも、最後にはこの私のことをこっそり「キンちゃん」なんて呼んでやがったそうだけど(笑)。

高野　尊敬という言葉で括れるかどうかはともかくとして、手強い大人がいるなと思ったでしょうね。父親のほうがはるかに若い、男は年じゃない、人間は年齢じゃないと、あの子たちは感じたはずだ。

深作　そうですね。「監督に演出してもらっちゃったー!」って無邪気に喜んでる子もいたりして、テレビスタジオなどでは味わえない濃密な空間だったのかもしれないな。

高野　幸せなことですよね。こういう話をしていると、僕も監督として映画を作りたくなる。もっとも、いわゆるタレント監督・異業種監督みたいにはなりたくないから、相当作戦を練ってから取りかからないと無理だと思いますがね。

深作　いや、やっぱりある程度失敗を積み重ねていただかないと(笑)。あまり大きな声じゃ言えないけど、異業種監督の皆さんの作品を見て、内心ホッとすることはありますな。映画というのは、これでなかなか難しいんだ、とね(笑)。

高野　しかし、今回ご一緒に仕事をして思ったのは、深作欣二は本当に幸せな監督だということ。これだけの数の映画を作れたのは全世界的にみても、あまり例がないんじゃないかと。

深作　そうでもないでしょうが、四十年間に六十本てのは、年間一・五本平均ということになりますか。もっとも若いときの本数稼ぎがあるから、成立するわけで。ここんところは二年に一本、三年に一本でしょ。

高野育郎×
IKURO TAKANO×KINJI

高野育郎(エグゼクティブ・プロデューサー) IKURO TAKANO

1951年5月8日生まれ。出版、音楽、映画といったメディアを横断するカルチャー・コングロマリット、アム・グループ代表。美術出版社編集長を経て「ジャパン・アベニュー」「セブンシーズ」などの編集長を歴任。この間、ヘルムート・ニュートン、ロバート・メイプルソープの展覧会企画、相模大野駅周辺開発のグランドコンセプトを立案するなど、出版から都市までをプロデュースする。現在、日本一の歴史を誇るクラス・マガジン「バケーション」の発行人兼編集長。

高野　それだって、これまでの映画製作で監督が消費した金、償却した金は百億円じゃきかないでしょう。百億捨ててきた。

深作　捨てたなんてとんでもない(笑)。返ってきた金だって百億ちょっとは越すはずだから。でも、とにかく計算してみると、使った金は百億円になるんですね、うわぁ(笑)。

高野　すごいね、普通の人間だったら、とてもそうやってもの作りはできないんだから。しかし、若いときに本数稼ぎしたっていうことおっしゃるけれども、それだけ集積された経験が「インコース高め必ず三遊間ヒットになる」というような演出術を身につけさせたわけでしょう。うらやましいかぎりです。

深作　しかし映画って仕事は、個に始まるけど、集団でないとできないものですからね。それは何にいちばん近いかと言えば、「祭り」でしょうか。そのお祭りでなんとか金儲けができないかというのが映画でしょう。祭りという遊びで人を楽しませ、そこにヘンチクリンなウサンくさいカオスを作ってしまう。そこへまた、ヘンチクリンな人間たちが集まってきて、さらにウサンくさいカオスを拡大する。

高野　この映画に関わったすべての人もヘンチクリンというわけですね(笑)。

深作　映画というのは、所詮ウサンくさい遊びです。それで一生を棒に振っても、その結果は自分ひとりで背負うしかない。でも、この遊びはニヒリズムとは違うんですね。それなりに一生懸命に遊ばなくちゃ、全然面白い映画になってくれない。

高野　これまでの偉大なる遊びはいかがでしたか。

深作　今度のように、自分の年齢にそむいてまで、孫みたいな子供らを集めて人殺しごっこをさせる。これも遊びなんだ。何のために年をとったのか、馬鹿じゃないかと世間様のヒンシュクを買いながら、それでも遊び続けるしかすることがない。「業」という奴でしょうかね、これも。

高野　しかし、監督が今回『バトル・ロワイアル』を撮ったのは、本当によかったと思いますね。監督は自嘲的に、孫みたいな年の子供と遊んだとおっしゃるけれど、テーマの選び方とか、じつにいい仕事でしたよ。監督がこの映画を作ったというのは、これまでのフィルモグラフィにさらなる光を添えるんじゃないかなという感じがします。

深作　結果として光るかどうかはともかく「孫みたいな年の子供らを集めて、ええ年して」というのは、実は自嘲というよりは煙幕なんですよ。本当に俺は面白かった、楽しかった。しょうがねえジジイだなまったく、と我ながら思いますけど。

高野　それが遊べる、楽しめるということじゃないですか。だって、監督よりも年上の人間を集めて映画を作っても、何も面白くないと思うんです。そんな作品が、アカデミー賞だかカンヌ映画賞だかをとったとしても、僕はなんだか寂しいな。

深作　年寄りを集めようとは私も思いませんね。やっぱり集めるなら孫ですよ。女の子はピチピチしてるしね(笑)。みんな力いっぱい走ってくれて、ほんとうにいい遊びをさせてもらった。あとは、願わくば、損にならんような(客の)入り方をしてほしいな。

高野　心臓に悪い(笑)。まあ、いいんじゃないですか。今世紀最大のテーマがすばらしい作品に仕上がって、反響や前評判も上々。エグゼクティブ・プロデューサーとしても僕はもう何も言うことはないぐらい満足です。結果のほうは蓋をあけてのお楽しみということにして、次世紀にまた新しい遊びを楽しみましょう。

TEXT:「仁義なきバトル・ロワイアル」(深作欣二/高野育郎共著 アスペクト刊 1,200円+税)より再構成

PHOTO/櫛引典久(くしびきのりひさ)

深作欣二監督　フィルモグラフィ

封切年	タイトル
1961	風来坊探偵　赤い谷の惨劇
1961	風来坊探偵　岬を渡る黒い風
1961	ファンキーハットの快男子
1961	ファンキーハットの快男子二千万円の腕
1961	白昼の無頼漢
1962	誇り高き挑戦
1962	ギャング対Gメン
1963	ギャング同盟
1964	ジャコ萬と鉄
1964	狼と豚と人間
1966	脅迫(おどし)
1966	カミカゼ野郎　真昼の決斗
1966	北海の暴れ竜
1967	解散式
1968	博徒解散式
1968	黒蜥蜴
1968	恐喝こそわが人生
1968	ガンマー第3号　宇宙大作戦
1969	黒薔薇の館
1969	日本暴力団　組長
1970	血染めの代紋
1970	君が若者なら
1970	トラ・トラ・トラ!
1971	博徒外人部隊
1972	軍旗はためく下に
1972	現代やくざ　人斬り与太
1972	人斬り与太　狂犬三兄弟
1973	仁義なき戦い
1973	仁義なき戦い　広島死闘篇
1973	仁義なき戦い　代理戦争
1974	仁義なき戦い　頂上作戦
1974	仁義なき戦い　完結篇
1974	新仁義なき戦い
1975	仁義の墓場
1975	県警対組織暴力
1975	資金源強奪
1975	新仁義なき戦い　組長の首
1976	暴走パニック　大激突
1976	新仁義なき戦い　組長最後の日
1976	やくざの墓場　くちなしの花
1977	北陸代理戦争
1977	ドーベルマン刑事
1978	柳生一族の陰謀
1978	宇宙からのメッセージ
1978	赤穂城断絶
1980	復活の日
1981	青春の門
1981	魔界転生
1982	道頓堀川
1982	蒲田行進曲
1983	人生劇場
1983	里見八犬伝
1984	上海バンスキング
1986	火宅の人
1987	必殺IV　恨みはらします
1988	華の乱
1992	いつかギラギラする日
1994	忠臣蔵外伝　四谷怪談
1999	おもちゃ

過酷な現実への人間的応答

少年少女が殺し合う姿を描きながら、実はこれほど前向きで希望に満ち溢れた映画は昨今めずらしい。我々が生きている世界、現実の社会とはそのようなものだと言いきった上で、ではどうするのか、どう生き残ってみせるのかという問題を突きつけるのだが、問題提示に終始する作品が多い中、本作は解答に繋がる希望をきちんと観客に伝えている。

凄絶な殺戮を生き残った主人公たちにとって、エゴを肯定するような自分探しや、パッケージ化された癒しはもはや意味をもたない。生きるためには戦わなければならないと自覚した上で、しかし自分たちは拳を振り上げることにためらい続けるだろうと呟く。それは暴力的な現実に抗し得る唯一最大の人間的応答だ。憂うべきは本作を単に不快だと退けたりR指定にしてしまう大人たちがいることだろう。これを教育上好ましくないと断じる大人たちの自信のなさこそ、少年犯罪の温床となる。BR法は決して絵空事ではない。

福井晴敏（作家）

血みどろの地獄にキラキラと希望のかけらが輝いている。そう、人生はゲームではない。

有栖川有栖（推理作家）

観終わって胃の中がグルグルしました。面白かったけど、面白かった！と素直に言葉にしていいのか迷ってしまいます。

乙武洋匡（フリーター）

テーマも描写もテレビでは絶対に真似できない作品。こういう映画がヒットする事を切に願う。

津川雅彦（俳優）

意外な展開がおもしろい。子供たちがすごく印象深かった。僕も今、たけしさんとバトル中です。

松田龍平（俳優）

これは誰の中にも在る〝キリング・フィールド〟。正視しよう。これに呑まれないように、これと闘うすべを、考えるために。

宮部みゆき（作家）

子供達の殺し合い、サバイバルゲームを興奮しながら見ている俺はなんなんだ!!

南部虎弾（電撃ネットワーク）

多くの子供達が死ぬのに、不快でないのは監督が命を大切に思っているから。映画が提示したテーマを考えてもらいたい。

佐藤浩市（俳優）

殺戮の時代に若者のリアルな狂気を知った。無情にも少しの共感と、興奮を味わう自分が怖かったです。

SILVA（シンガー）

なんという清々しさ！　徹底したヴァイオレンスのみで永遠のモラルを語った「別格」の映像。

巽　孝之（慶應義塾大学教授）

爆発か、圧殺か。生徒と教師をゲーム盤に閉じ込める、歯止めのきかない論理が怖い。

小谷真理（評論家）

観ている間、身体の中でアドレナリンが出っぱなしになっているのを感じました。

田崎竜太（POWER RANGERS USAディレクター）

少年法の改正を進めた国会議員たちにこの映画を観せたかった。痛烈な社会批判を含む力作である。

宮崎　学（作家）

色でたとえるとしたら赤。一言では語りつくせないがヴァイタリティ溢れ、生きるということに関しての強さがある映画。

佐伯日菜子（女優）

スゲエでいいじゃん

革命家・重信房子、逮捕のニュースを見て、優勝者の少女が笑う『バトル・ロワイアル』の冒頭が浮かんだ。女革命家をカッコイイという人もいれば全然ダメと言い捨てる人もいる。個人的には、常に激しい状況に身を置いていただけでスゲエとか思うけれど。

深作欣二監督は、戦争のときに爆弾から身を守るために友達の下に潜り込んだと言う。みんながそれぞれそうやっていたと。そして、その行動に罪悪感を持つわけでもないし、本能が正しいのだと肯定することもないのだと。「ドッチデモナイ」っていうのがポイント。イイとか悪いとか、好きとか嫌いとか、勝ちとか負けとか、はっきり言いきる世の中は生きづらい。正しさの指針があったほうが安心だけれど、正しさって何だ？　正しさに縛られすぎると、病気と同じでかえって他の状況にも免疫がなくなるんじゃないかな。

パンフレット制作にあたり創作現場に触れ、とにかく行け、と煽りまくりな深作監督の方法論は15歳から変わらないんだなとか思った（チョット短絡的だったらすみません）。監督だったらきっとBRは勝者だ！　それも別にイイ意味でも悪い意味でもなく、ただスゲエってことなんですケド。

木俣　冬（パンフレット編集・ライター）

FOR BATTLE ROYALE

『バトル・ロワイアル』を観た人々の熱い声。

RESPECT FOR KINJI FUKASAKU

『バトル・ロワイアル』が60作目の作品となった映画監督・深作欣二の作品群から、フェイバリット作を選んでもらった。

阪本順治（映画監督）

県警対組織暴力

『県警対組織暴力』の撮影現場を追ったテレビ番組を見たことがある。主役だけでなく名も無き俳優達を怒鳴り散かしながら演出する深作監督の姿に愛を感じた。映画に対する執着とはこういうことだと思った。川谷さんが取り調べ室で文太さんや山城さんに殴られ蹴られ、やがて裸にされる場面で、深作さんは、矢鱈目をしばたたかせていた。後に聞いたら、そうすることによって視覚的にテンポを速くしているのだという。つまりは瞼はシャッターなのだ。もっと激しく、もっと速く、深作さんの演出中の体温（テンション）と脈拍（パワー）は尋常じゃない。

『県警対組織暴力』に込められた男の痛みや人間に対する皮肉や、現行社会に対するもどかしさは、観る度に私の生理を一掴みに狂わせてしまう。"世の中捨てたもんじゃない"という映画を観ると吐き気をもよおす私にとって、"世の中捨てたもんじゃい"と唾吐くこの映画が好きだ。『顔』のトンネルのカットはこの映画のラストシーンに出てくるトンネルのカットに対する、勝手ながらのオマージュです。

杉作J太郎（東映研究家）

現代やくざ人斬り与太

まず俺の杉作J太郎という名前、この杉作部分の『作』は深作監督の『作』を勝手に強奪したものであることをこの場で激白しておきます……し〜ん。興味ゼロメートル地帯の話で申し訳ありませんでした。さて、その申し訳ないというのがただの文章であるかのように、さらに俺の中学生の頃の話であります。

私立の中学を退校処分になって「みっともないなぁ」外を歩くのも辛かった俺に、堂々と外を歩く術を教唆してくれたのが港の近くの名画座で観た『仁義なき戦い』シリーズであった。それ以後、己の欲望のままに生きて今日に至る。ま、それはともかく『現代やくざ人斬り与太』で菅原文太さんが展開したみっともない姿。それは従来の任侠映画が提示してきた男の美学とはかけ離れたものであったが、男が生きていく生き抜くということは支離滅裂でありながらも支離滅裂ではいられない、その困難に満ちている。職業不定39才独身きわめて好色。また俺の話か。元気です。

樋口真嗣（特技監督）

宇宙からのメッセージ

小学生の分在で『仁義なき戦い』や『県警対組織暴力』を映画館で観ることのできなかった不幸な世代なので、「マイファーストキンジ」は中学入りたての春に観た『宇宙からのメッセージ』になる。その夏に押しよせる『スターウォーズ』という黒船に備えて猫も勺子もSF、といったムードが世の中（といっても中学生なので休み時間や放課後という狭い世界だが）にや満延していたし、中学生ながらにして情報戦の勝利こそがクラスのヒエラルキー上位を確保するには必要不可欠だったから、もう既に全米で公開中のその内容は雑誌等であらかた把握していた。そこに『宇宙からのメッセージ』だ。大気圏へ垂直に突入して、追跡する警察所属の宇宙艇とチキン・ランをキメる宇宙暴走族たち。辺境惑星の酒場に吹きだまる、ラメ入りカンカン帽にダボシャツの宇宙チンピラ。そりゃもちろん本家には及びもつかないクオリティであったとしても、遥かに味わい深く魅力的なディティールとスピリッツが当時中学生の青い蕾の如きナショナリズムを直撃した。やるじゃん日本だって！　二番煎じを本家公開前に先制する、といった無謀なゲリラ的企画の中に、キラリと輝く熱い魂を仕掛けた監督の仕事を「職人」などという陳腐な言葉では括る事は断じて出来ないし、それを見抜いて感動しまくった中学生も大したものだと思いたい。しかし休み時間の中学生どもにはそれが理解されず、それから数ヶ月後の本家公開に至っても変らぬ我が思いだけが孤立することになるのですなあ。

松尾スズキ（劇作家）

暴走パニック大激突

『暴走パニック大激突』が大好きなんですね、私は。もう8年も前に書いた「神のようにだまして」という芝居があって、いや、若かったんだよな、俺、でも、かなり若さを無駄に持て余してたみたいで、それは、松尾スズキ＝エロ・グロ・ナンセンス＝バカという評価を決定づけた最高の失敗作といわれているわけですが、不評につぐ不評でションボリしている私に、唯一「この芝居に元気をもらった！」と言ってくれた人がいたのですね。彼は当時日テレのディレクターをやっておった訳ですが、その彼が「そんな松尾さんなら、こんな映画が好きでしょう」と一本のビデオテープを渡してくれたんです。それが『暴走〜』でした。も、すんごかった。乱暴でスケベで愚かでとにかくパワフルで何にもましてくだらない。室田日出夫、川谷拓三、出演者全員最初っから最後まで目ぇ剥きっぱなし。イーッてしっぱなし。いやあ、バカでいいんだ。一発で納得。それで私は勇気を持ったのでした。

そんな深作監督が最近私の芝居を観て「演出したい」と言ってくださっていたのを風の噂に聞いたことがありました。実現はしませんでしたが、耳の正月でした。深作監督。いつまでもお元気で。

山根貞男（映画評論家）

乱反射のエネルギー

深作欣二の新作『バトル・ロワイアル』では、四十二人の少年少女が無人島でのたうち回って死闘をくりひろげるとき、思春期の叫びが乱反射状に沸き立つ。この乱反射こそ深作映画の一番の魅力であろう。あの『仁義なき戦い』シリーズがまさにそうであった。前作『おもちゃ』にしても、日陰の女たちの生の乱反射こそが哀感をにじみ出す。

このことは深作映画の多くが群像劇であることと無関係ではない。むろん中心になる人物は必ずいて、『バトル・ロワイアル』では藤原竜也と前田亜季がそうだが、ドラマの眼目は彼らを含む四十二人全員のジタバタぶりにある。中心というなら、むしろ教師役ビートたけしであろう。彼の位置は『仁義なき戦い』シリーズの菅原文太や『おもちゃ』の富司純子に似ている。

明らかに深作欣二は単独のヒーローにあまり興味はなく、何人もの登場人物にジタバタ悪あがきをさせ、そこに人間の生の裸形を見ようとするのである。だから深作映画は多焦点のドラマ構造をなす。

最初期のギャング映画『白昼の無頼漢』からすでにそうで、日本人、韓国人、白人、黒人など、多様な人物の思惑のもとに死闘を描く。やくざ映画『博徒外人部隊』も、戦争犯罪告発と戦後批判を重ねた『軍旗はためく下に』も、時代劇『柳生一族の陰謀』も、SF活劇『宇宙からのメッセージ』も、大正文士の愛憎を描く『華の乱』も、その点では変わらない。『狼と豚と人間』は三國連太郎、高倉健、北大路欣也の兄弟が殺し合うアクション映画で、三焦点が面白さを発揮する。

ジャンルの多彩さに注目しよう。深作欣二はどんな映画であれ、多焦点のドラマから乱反射のエネルギーを放散させるのである。渡哲也が主人公の『仁義の墓場』でも、死神のような若いやくざの巻き起こす乱反射こそが痛く胸に突き刺さってくる。

もともと映画とは多面構造体であり、さまざまな見方、感じ方が成り立つ。深作欣二はそのことを踏まえて、乱反射状のドラマを差し出す。深作映画の多くがバイオレンスに満ちているのも、暴力にこそ人間の生の乱反射のエネルギーを見るからにちがいない。そこから魂の叫びがほとばしる。

深夜作業組完全版 10大バトル!

PRODUCTION NOTE

プロデューサー 深作健太

99年の4月、まだ出版されたばかりの原作の帯『中学生42人皆殺し!?』を見た監督が、年齢70にして「オレがこれを撮る!」と言い出した時は、ついにモーロクしたかと疑ってしまった。その後、私は東映への人質としてプロデューサーをやらされるハメに。先輩の小林千恵さんと各企業へ資金集めに走るのだが、いきなりオンナ・コドモが飛び込みで「中学生が殺し合う映画です!」と説明しても普通はどこも眉をひそめるばかり。結局、この企画に物好き(失礼)にも出資して下さった7社によって製作委員会が結成され、2000年6月20日クランク・イン、70日の撮影日程で9月1日アップ、編集やワルシャワでの音楽録音といった仕上げ作業を経てついに10月25日、この前代未聞の「問題作」は完成した。

BATTLE 01 深夜バトル! 70才の老人vs中学生42人

オーディションが始まったのは1999年10月の事。その後、半年かけて演技経験者ばかり800人以上の候補者の中から選び抜かれたのが精鋭42人。基準は何より運動神経と、「監督とコミュニケーションがとれる」事。なんといっても「おまえの足、何文だ?」って聞く監督だから……。御存じの通り、深作組は撮影が深夜にまで及ぶ事から「深夜作業組」と呼ばれているが、監督は年くって朝も早くなってしまったため、まるで「二十四時間作業組」。成長期の子供達は眠気をこらえ、よくぞしつこい深作演出に堪えてくれた。監督も第二の「ピラニア軍団」(かつて東映のヤクザ映画を支えた大部屋俳優達の演技集団)が出来たと大喜び。映画はあくまでディスコミュニケーションがもたらす悲劇を描いた物語だが、現場は70才の監督と十代の俳優達が織りなす、奇跡的なくらい濃密なコミュニケーションによって支えられていた。

BATTLE 02 夢のバトル! ビートたけしvs深作欣二

ビートたけしvs深作欣二の対決は、実は『その男、凶暴につき』(北野武第一回監督作品、当初は深作が監督する予定だった)でのニアミス以来、実に十一年ぶりの夢の顔合わせとなる。たけしさんの起用は監督たっての希望であり、役名もズバリ「キタノ」。現場では、監督の目線に入らぬよう、セットの裏で「アーもう帰りてぇ」とか言いながら、しっかり監督の演出は注意深く耳で聞いていたたけしさん。「一作目が深作さんだったらオレ絶対監督にならなかったよ」との事。とにかく熱い炎の深作演出と、俳優ビートたけしの静かなる氷の暴力がぶつかり合い、深作組と北野組両方の精鋭スタッフが結集した撮影現場は、緊張から汗と冷汗が入り混じる。そんな中、教室の隅でこっそり生コマネチを披露、生徒達の緊張を解く優しいキタノ先生の姿もあった。

BATTLE 03 空飛ぶ! 藤原竜也

すべてのシーンをスタントなしでこなし、その「熱い」人柄がスタッフを驚かせたのが藤原くん。TVでは美少年として、アンニュイな役柄での魅力が目立っていた藤原くんだが、今回は本人の地に近い(?)「熱い」七原をエンジン全開で演じている。1カット1カットの集中力はとにかく凄まじく、「少しは気ィ抜いた方がいいよ」と余計な心配をしたくなるほど。診療所での銃撃戦では爆炎の中、宙に舞うフジタツという貴重なカットが撮影される。余計なギミックは一切なし。JACの諸鍛冶アクション監督の指導の下、青アザ擦りキズあたりまえでナマのアクションに挑む藤原くんの姿は、文句なしの臨場感を生み出している。ラスト、渋谷での撮影終了後、そのまま原作の七原よろしくアメリカでのCM撮影に旅立った藤原くん。多忙なスケジュールに負けず、これからもスゴイ役者への階段を着実に昇っていって下さい。

BATTLE 04 実は最強!? 前田亜季

「亜季ちゃんって芸歴八年のベテランだよね」「えーっ、そんなやってないですよ。デビューしたの92年だし……あ」去年の十月、まだ固まっていない典子のキャラクター設定を読んで、「これってあたしみたい」と自然に呟いたのを覚えている。「こんな子、隣に並ばせたらたけしさん、困るだろうな」そんな思いから、まずシナリオは劇場公開版では幻となってしまったキタノと典子の川原でのラストシーン(!)から組み立てられていった。どんなシーンでも、全く臆する事なくカンロクでのりきってみせる亜季ちゃん。ふてぶてしいのではない。ホワ～ンとあがらない。ラスト、教室でのキタノとの対決では愛を告白された男の死に直面して、たぶんそれは本人も無自覚の内に「女」の表情さえ見せている。まさしく十五才にして大物女優の誕生なのだが、唯一心配なのは八年目で「新人賞」って貰えるのか? あ、もうこれは「主演女優賞」か。

BATTLE 05 イイ兄貴! 山本太郎

監督「おまえいくつだ?」山本「16才ですっ!」監督「ちがう、身長聞いてんだ!」オーディションで監督と山本くんが交わした一発目の会話である。最初、川田役に山本くんの名が挙がった時は、製作委員会の猛反対があった。だが監督は「太郎がダメならオレも降りる」と粘り、結局委員会の方が折れる事に。そんな事もあってか、監督は山本くんが現場にいるとホッとする。山本くんにはかつて監督が愛した俳優達の匂いがある。時にみんなの笑いもとり、42人のイイ兄貴分になってくれる。すごい朝早く撮影所に入って、一生懸命台詞覚えてたところへ全然変わった改訂持ってった時はのけぞっていた山本くん。現場では監督のカンペ攻撃にも臆せず、堂々と深作組の兄貴分をつとめてくれました。誰だ? 中学生に見えないなんて言ってるのは。誰がどう見てもカッコイイ兄貴・川田章吾じゃないですか。

BATTLE 06 「カズヤでいいっスよ」 安藤政信

「オレ、この作品出てマジよかったっスよ!」嬉しそうに安藤くんが寄ってくる。何かいい事があったのかと思うと「だってジョージさんっスからね!」。監督は、年に似合わずしっかり生徒42人の顔と名前を全部覚えてたりする。だけど疲れてくるとやっぱり言語中枢から70才になる。カメラマンの柳島さんの愛称は「ジミーさん」。だがすっかり監督が間違えて「ジョージさん、ジョージさん!」とセットの中で連呼すると、スタッフは誰が呼ばれてるのか理解出来ずポカンとしている。思わず山本くんが「僕ですか?(山本譲二)」とボケてくれる。しまいに安藤くんの方は「カズヤ、カズヤ」と呼ばれる始末。それって『ギラギラ～』の木〇一八? そういや監督へなつくとことか雰囲気似てるけど……。後でごめんねと謝ると、「いえ、俺カズヤでいいっスよ」と言いながらもその背中はスネていた。ラスト、廃墟の炎のシーンでは、血の涙を流したメイクに「デビルマンみたいでカッコイイじゃん」とからかうと「さっきは別の人に大槻ケンヂって言われた……」とさらにまたスネていた。

BATTLE 07 決戦場は無人島! 監督、決死のダイビング

8月の最後の一週間は八丈島で宿泊ロケ。現場となる八丈小島までは正規の交通ルートはなく、毎朝スタッフは八丈本島から漁船をお借りして30分、キャストや機材はホテルの前に特別に設置したヘリポートから、ヘリで10分かけて小島へと渡る事に。亜季ちゃんらキャストは初めて乗るヘリの轟音に大はしゃぎ。八丈小島は三十年来、無人島のため水も電気もなく、製作部は水のタンク、照明部はジェネレーターを担ぎ上げ、猛暑の中、山を昇りながらの撮影だった。スタッフ全員真っ黒に日焼けした最終日。一同酒が回り服を着たまま、プールめがけてのダイビング大会。あまりの乱痴気騒ぎにホテルの従業員やお客が総出で呆れて見守る中、いきましたよ。監督が。誰も誘ってないのに、若い奴に負けじと自ら飛び込む70才。まぁ、死んでもあと分量たいして残ってないし大丈夫かと思っていると、私も藤原クンに落とされた。水中では隣で、プロデューサーの片岡さんが「アア、オレのケイタイが!」と叫んでいる。結局、今まで培ったメモリーは、全部とんでしまいましたとさ。

BATTLE 08 現代のモーツァルト! 天才・天野正道

さて、撮影が終わりいよいよ編集作業となったところで、大混乱となったのが作編曲・指揮の天野さん。映画全部の尺(長さ)が出て、やっと作曲出来る状況になったのがポーランド出発の一週間前。時間がない。あまりにも時間がない! しかも『バトル～』は、ほぼ全編に渡り音楽が鳴り響く映画である。一週間、不眠不休で作曲しても間に合わず、ワルシャワまで持ち越しに。飛行機の中でまで作曲され、とうとうワルシャワフィルでの音楽録音当日。総勢百二十人に及ぶフルオーケストラの演奏を指揮しながらも、休憩時間には宿へ帰って作曲を続けた天野さん。ついに、たった二日間の録音で全四十曲、総計九十分もの音楽録音を成し遂げた! そしてあのクオリティ、重厚な響き! まさに天才っ! スタジオでは、徹夜のハイな状態から、つまらないギャグを連発し、一人で大ウケする天野さん。(すいません。あまりつまらなかったのでひとつも覚えてません……)私はそこに、現代のモーツァルトを見た!

BATTLE 09 もうひとつのバトル! W深作の仁義なき戦い

さて、プロデュースを兼ねてシナリオを担当させていただいたのがわたくし、健太です。脚本製作は一月から始めたんですが、これがもうウチの監督は大変で、深夜のファミレスでパフェ食いながら生クリームのついたスプーン振り回して「オレはやっぱり人殺しを主役にしたいっ!」とか「ラストは渋谷の交差点で回りながらマシンガン撃つんだ、テルアビブだぁ!」とか方針がコロコロ変わってもう訳がわからない。なんとか決定稿が出来て撮影に入っても、朝、現場へ行く車の中でまであーだこーだと大喧嘩。ちなみに冒頭の七原の父が首吊りしているシーンで、トイレットペーパーに「秋也、ガンバレ」と書いてあるのは監督のアドリブ。スタッフに「あれは健太、ガンバレと書いてあるんやで」と皮肉られましたが、さて、息子側からの返答としましては……? 教師キタノの側から生徒を観る親父の「演出」vs生徒の側からリアルな感情を拾いたい息子の「脚本」という親子対決が、そのまんまこの作品がもつ〈大人vs子供〉の対立をストレートに映し出している、といいんですが。

BATTLE 10 必殺武器! 「ハリセンちょっぷ」

監督のイスの袋にはデッカイ必殺武器「ハリセンちょっぷ」が入っていて、ミスった生徒はこれでバシッとやられます。側面にはキルマークのようにやられた人の名前が書かれていって。誰だ? 「ビートたけし」なんてラクガキしたのは! たけしさんは殴ってません(笑)何より現場でスタッフが疑問だったのは、70才の監督がどうして一番元気なのか、という事。70才にして、短パンにタンクトップ、真っ黒に日焼けして、渋谷の街を駆け抜ける! 必死に追いかけるスタッフは、まるで徘徊老人を捕まえようとしてるかのよう。たけしさんいわく「絶対ヤクやってる」との事ですが、あながち間違いではなかったんじゃないかと。撮影中にジミーさんに教わった巻き煙草を嬉しそうに巻いている監督を見て、ウチで祖母などは「いい年こいて逮捕はみっともないよ」と真剣に心配してました。深夜に愛用の精力剤をスタッフみんな並ばせては配給している姿は、まさにヤバイじいさんそのもの。そういえば誰だ? 監督の机の上に小道具のヒロポン持ってきてわざわざ置いたのは。

CAST

七原秋也
藤原竜也

中川典子
前田亜季

川田章吾
山本太郎

千草貴子
栗山千明

三村信史
塚本高史

杉村弘樹
高岡蒼佑

国信慶時
小谷幸弘

内海幸枝
石川絵里

野田聡美
神谷涼

琴弾加代子
三村恭代

瀬戸豊
島田豊

飯島敬太
松沢蓮

新井田和志
本田博仁

元渕恭一
新田亮

江藤恵
池田早矢加

清水比呂乃
永田杏奈

北野雪子
金澤祐香利

日下友美子
加藤操

榊祐子
日向瞳

谷沢はるか
石井里弥

松井知里
金井愛砂美

中川有香
花村怜美

沼井充
柴田陽亮

笹川竜平
郷志郎

黒長博
増田裕生

月岡彰
広川茂樹

金井泉
三原珠紀

小川さくら
嶋木智実

山本和彦
佐野泰臣

赤松義生
日下慎

大木立道
西村豪起

織田敏憲
山口森広

倉元洋二
大西修

旗上忠勝
横道智

滝口優一郎
内藤淳一

稲田瑞穂
木下統耶子

南佳織
関口まい

矢作好美
馬場喬子

天堂真弓
野見山晴可

藤吉文世
井上亜紀

前回優勝者の少女
岩村愛

キタノの娘・詩織（声）
前田愛

川田の恋人・慶子
美波

レポーター
山村美智子

兵士
平井武之
浅川とむ
中原裕也
小森敬
中村亮太
宇賀神明広
村上容一
新崎貢治
梨子木淳一
北川浩
川嶋秀明
田崎海路
立川光明
奥村秀嗣
矢沢大介
馬場伸樹
岩澤直樹
徳久幸治
真田幹治
横倉和伯
本間茂樹
荒木和夫
松原剛志
吉沢晃
白浜健三
奥村寛至
高野翔司
杉本凌侍
米田基
小嶋英彬

スタンドイン
芦川誠
芸優
劇団ひまわり

安城三尉
竜川剛

七原の父
谷口高史

林田先生
中井出健

バスガイド
深浦加奈子

ビデオのお姉さん
宮村優子

相馬光子
柴咲コウ

桐山和雄
安藤政信

キタノ
ビートたけし

STAFF

企画
佐藤雅夫
岡田真澄
鎌谷照夫
香山哲

エグゼクティブ・プロデューサー
高野育郎

プロデューサー
片岡公生
小林千恵
深作健太
鍋島壽夫

協力プロデューサー
麓一志
富山和弘
加藤哲朗
大野誠一
松橋真三
竹本克明

原作
高見広春（太田出版刊）

脚本
深作健太

作編曲・指揮
天野正道

演奏
ポーランド国立ワルシャワフィルハーモニックオーケストラ

撮影
柳島克己（J.S.C.）

照明
小野晃

美術
部谷京子

録音
安藤邦男

編集
阿部浩英

監督補
原田徹

製作担当
田中敏雄

撮影Bキャメラ
瑳哲也

装飾
平井浩一

小道具
片岸雅浩

記録
牧野千恵子

音響効果
柴崎憲治

衣裳
江橋綾子

ヘアーメイク
田中マリ子

スチール
原田大三郎

アクションコーディネイター
諸鍛冶裕太

製作主任
石田基紀

宣伝プロデューサー
杉田薫

音楽プロデューサー
山木泰人

アシスタントプロデューサー
小林勝江
藤田大

監督助手
本田貴之
松川嵩史
佐和田惠
浅利宏

撮影助手
小松高志
的場光生
大嶋良教
松宮 学
甲斐公康

特機
平山茂

照明助手
今泉尚
藤森玄一郎
南園智男
五十嵐孝文
福田裕佐
西村昌幸

録音助手
南徳昭
長島慎介
山崎周平

美術助手
新田隆之
小林久之
川合重則

装飾助手
桑田和夫
斉藤眞人

[illegible]
長内健夫

操演
羽鳥博幸

操演助手
宇田川幸夫
高見澤利光

特殊メイク
松井祐一

ガンエフェクター
納富貴久男
神尾悦郎
小西剛

メイク助手
高倉梨恵

編集助手
前嶌健治
坂東直哉

ネガ編集
辻井好子
菊池玲子
佐藤洋子
岡部由紀子
小池礼乃

音楽ミキサー
大野映彦

サウンドエンジニア
上野未来
中野明

リレコ
利澤彰

効果助手
伊藤瑞樹
河本敬子

オプチカル
高橋幹夫

タイミング
永沢幸治
平井正雄

車輌
早川幸位
善養寺満
鈴木晴久

漁船
宮崎泰光
宮崎岩一

ケータリング
小水とうた

監督付
平野洋介

製作進行
安田邦弘
吉崎秀一
金子拓也
小菅順子
土屋大路

製作経理
鍋島章浩
塩崎遵

宣伝
星玲子
桝林宏明
里登志幸
瀧江俊一

製作宣伝
月岡敏彦

宣伝スチール
加藤義一

コンピューターウィルス指導
BEAMZ

ハッキング指導
UNYUN

銃器技術考証
高川雄一郎

兵士指導
越康広
工藤覺豐
川上良一
田中浩幸
久行敬子
奥山美子

アクション指導
大藤直樹
今井靖彦
田邊智恵
平木ひとみ
岡田良治
高橋光
前川貴紀
藤田健次郎
四方宗

ボイス・トレーニング
寺田はるひ

視覚効果スタッフ

VFXスーパーバイザー
大屋哲男
道木伸隆

マリンポスト

デジタルエフェクト
中市好昭
尾上由香
小笹隆之
佐々布伸哉
田中貴志
辻野南
今井輝行

タイトル
竹内秀樹
西内久美子

日本映像クリエイティブ

コーディネーター
杉木信章
松岡勇二

デジタルエフェクト
豊直康
上田茂
越智裕司
渡辺真志
赤石涼子

東映化学デジタルテック

コーディネーター
大元克己

スキャニング
大津寄宏一

デジタルワーク
塩田敏広
泉有紀

レコーディング
森信介

kodak
アオイスタジオ
ナック イメージ テクノロジー
日本照明
東京美工
東京衣裳
ビックショット
ベレッツア スタジオ
ジャパンアクションクラブ
ビッグファイタープロジェクト
マリンポスト
三陽編集室
ARQUEBUSE
日本映像クリエイティブ
フェニックス・エンタテインメント
ランナーズ
アラヤロケーションサービス
マエダオート
東映化学工業
東映東京撮影所
Sup.Supplement-Ya
太田出版
秋田書店
ミュージックプランターズ
東京映像工房

協力
東邦航空
アンティリーズ
八丈島役場産業観光課
八丈島観光協会
東海汽船
エアーニッポン
プリシアリゾート八丈
エンジェル観光バス
不動丸
岩丸
メモリー観光バス
ホテルサンルート佐野
マホロバマインズ三浦
聖進学院
ラ・ヴォーリャマッタ
エス・スリー
鬼石町
みうら漁業協同組合松輪支所
アークホテル東京
ロイネットホテル武蔵野
WOMB
Del grappa

衣裳協力
バックスタジオ
tasco
asics
ペンタックス販売
サンクルルーシュ
イワキメガネ
D.D.I
DRAGON FORCE
MARUI

「バトル・ロワイアル」製作委員会
横濱重雄
吉田順
奔保彰良
李由子
綿引崇
渡辺卓次
小松賢志
佐野俊広
白濱なつみ
櫻野孝人
中澤雅都
田中和彦
板谷健一

写真提供
遠藤正雄
板村光一郎
燈光会

資料提供
総合出版データハウス
Back Section

ホームページ制作
メディアファクトリー＠Biz
佐々木裕一郎
田島満
鈴木由昭

メインタイトルロゴデザイン
中山泰

制服デザイン
BA-TSU
CreativeDirector
Ruki Matsumoto

劇中画
北野武

サウンドトラック
カルチュア・パブリッシャーズ

主題歌
「静かな日々の階段を」
Dragon Ash
作曲／作詞 降谷建志
（HAPPY HOUSE/Victor Entertainment,inc）

DOLBY DIGITAL

配給
東映

製作協力
深作組

製作
「バトル・ロワイアル」製作委員会
東映
アム アソシエイツ
広美
日本出版販売
MFピクチャーズ
WOWOW
ギャガ・コミュニケーションズ

監督
深作欣二

www.battle-royale.com

2000年12月10日発行
発行所／東映 事業推進部
印刷／三映印刷

編集・文／木俣 冬
スチール／原田大三郎・加藤義一
CREATIVE DIRECTOR／金松 滋（O-five Remix）
ARTDIRECTION&DESIGN／河口洋範（O-five Remix）
DESIGN／印南貴行（O-five Remix）
イメージフォト／原田ヒロシ

定価700円（消費税込）

BATTLE ROYALE